



自主学習を促す英語eラーニング教材の開発とその評価

その他のタイトル	Development and Assessment of eLearning for promoting English self-learning.
著者	岩? 千晶, Humphries Simon, 森 朋子, 竹内 理
雑誌名	関西大学インフォメーションテクノロジーセンター年報 : ITセンター年報
巻	7
ページ	17-24
発行年	2017-07-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018851

自主学習を促す英語 e ラーニング教材の開発とその評価

Development and Assessment of eLearning for promoting English self-learning.

関西大学	教育推進部	岩 崎 千 晶
関西大学	外国語学部	Simon・Humphries
関西大学	教育推進部	森 朋 子
関西大学	外国語学部	竹 内 理

1. 研究の背景と目的

現代の社会には、環境問題、国際的な平和の保持など一つの国だけでは解決することが困難な課題がある。こうした課題には、複数の国で解決に取り組むことが求められ、国を超えた課題解決に取り組むグローバル人材の必要性が指摘されている。また社会問題だけではなく、経済においても企業の海外進出により様々な国の人々と国境を超えて円滑に働くことが求められており、グローバル社会が進展していることがわかる（友松2012）。産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）は、「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」において、グローバル人材とは日本人としてのアイデンティティを保持しつつ、専門性と教養を備え、異なる言語や文化価値観を乗り越えて、協調性をもって活動できる力を持った人材だとしている。中でも協調性を発揮したり、異なる言語や文化を超え、コミュニケーションをとったりするには外国語運用能力が欠かせない。そのため大学は外国語に関するカリキュラムを充実させるとともに、授業外に外国語に関する学習支援を実施するなど外国語の習得に力を入れている（北爪2013）。

関西大学では、英語教育の大幅な改革を敢行し、一人ひとりの学生がグローバル社会に対応するためのリテラシーやコンピテンシーを獲得するための努力を続けている。その中の1つの柱に、少人数授業などの全学英語教育のカリキュラム改革が謳われており、全学における英語のプレースメントテストの導入や習熟度別教育がスタートし、改革は着実に推進されている。これらの取り組みは、全学英語教育における能力の質の保証を担保するものであり、平均的な学生や、いわゆる基礎学力が不足がちの学生にとって、十分な教育・学習支援体制が整いつつある。これに加えて、留学への準備をする学生や、大学4年間を通じて英語を学び、さらに能力を伸ばそうとする上位クラスの学生に向けた教育的方策強化に関しても、上記の取り組みは配慮を行っている。この配慮の中で、この層に対しては、二者間や多者間での交渉レベルの能力習得を目指しているといえる。しかしこうした能力を育むには、授業内だけの英語学習では限界がある。授業外の時間も活用して学習者自身が積極的に学ぶことが

必要となり、大学はそのための学習環境を整備する必要があると考える。その1つの方策として英語での授業や留学準備に向けた教育を展開する際の、質の高いeラーニング教材提供が不可欠であるといえよう。

そこで、本研究では英語を媒介とする講義の映像を活用したeラーニング教材の開発をし、その評価を行うことを目的とする。具体的には英語学習に取り組む上級者（留学準備をする学習者や上位クラスにおける英語学習者等）を対象としたeラーニング教材を試行的に開発・導入し、その効果を検証する。

2. 研究の方法

本研究では2016年6月～7月にeラーニングに取り組んだ学生53名を対象にアンケート調査を実施し、授業後に教材の効果、課題を確認した。対象とした学生は、「英語上級クラスに所属する学生」、「留学を考えている学生」、「英語に関心を持つ学生」を対象に広報をし、参加を希望した学生とした。eラーニングの利用を希望した学生らは課外において自主的な学習として、eラーニングを受講した。学年は1年生37名、2年生3名、3年生4名、留学生8名、大学院生1名となっている。

アンケート調査では、自主学習としてeラーニングをいつどこで受講したのかといった実施形態に関する設問を自由記述で尋ねた。また、eラーニングを活用したことによる成果に関する設問、eラーニングの操作性に関する設問に関しては5件法（そう思う、ややそう思う、どちらともいえない、あまりそう思わない、そう思わない）で尋ねた。「eラーニングで今後希望するテーマ」、「eラーニングの難易度を選んだ理由」、「eラーニングの良さと課題」などに関しては自由記述形式で問い、調査結果に対する分析考察を加えた。なお、参加者にはデータ使用の同意を書面で得た。

3. eラーニング教材のデザイン

教材は8レッスン開発し、1レッスンは5つのステップから構成されている。① Video Lessonでは、英語ネイティブの教員による英語での講義を聞き取る学習を行う。これは留学した際に、現地での講義に慣れておくことやリスニング力を鍛えることを目的としている。レッスンは15分程度の動画である（図1参照）。また、本eラーニングはWi-Fiの接続があれば、スマートフォンやタブレットからの視聴ができる仕様とした。学生が通学中や自宅での時間を活用して、円滑に学習が可能となるように配慮した。



図1 Video Lesson の画面

② Words は (undoubtedly (adv.) without doubt, certainly) といった具合に、映像で活用されている用語の意味について確認を行うステップである (図2 参照)。

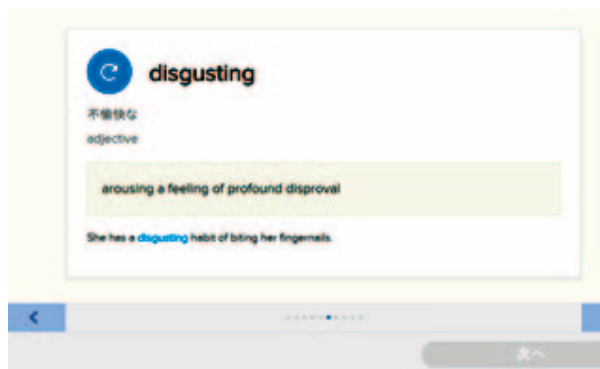


図2 Words の画面

③ Reading は、映像で活用されている内容のまとめがされている150Words 程度のリーディングを行い、映像で提供している内容の理解を確認するステップである。

④ Questions for the reading (with bilingual cues) は、Reading に関するクイズに答えることで、英文読解の学習を行うステップである (図3 参照)。

(1) What do many people who have visited the U.K think about British food?

a) It's better than how they imagined.
 b) It's worse than how they imagined.
 c) It tastes exactly how they imagined.

The correct answer is a). The passage says people who have visited the U.K tend to get a good impression toward its food.

図3 Questions for the reading の例

⑤ Questions for the Video Lecture (with bilingual cues) は、映像の内容に関するクイズに答えることで、リスニングの理解度を確認するステップである。

本教材で扱うテーマは、British Food Culture、British Sport Football、British TV: Continuity and change など海外の関心事や海外に関する教養としてもふさわしいテーマを 8 レッスン取り入れた (① British Food Culture ② British Sport Football ③ British TV: Continuity and change ④ Australia History ⑤ Australian Food Culture ⑥ Australian Popular Places ⑦ Philately: The Art of Stamp Collecting ⑧ What's in a Text? Uncovering the Nan'yo gunto dokuhon)。なお、今回は、特に、学生が留学に行くことが多いイギリス、オーストラリアを中心に挙げた。

4. 調査の結果と分析考察

4.1 eラーニングに対する学習の実態

本 eラーニングは授業外の自主学習としての扱いであったため、自主学習として eラーニングをいつどこで受講したのかといった実施形態に関する設問を用意し、学習者がどのように eラーニングに取り組んでいるのかを調査した。記述データ集計後に分類困難な回答はデータに含めなかった。

「いつ eラーニングを学んでいるのか」という学習時間帯に関する結果を表 1 に示す。調査の結果、帰宅後という回答が多く、学習者が授業外にも積極的に学ぶ姿勢が受け取れた。次いで空きコマや空き時間という具合に、大学での空き時間を学生が有効に活用しようとしている姿も見受けられた。

表1 eラーニングの学習時間帯 (人)

朝	1
帰宅後	21
休日	5
通学中	3
空きコマ、空き時間	9
お昼休憩中	1

(N = 40)

次に、eラーニングの学習場所の結果に関して表 2 に示す。学習時間帯の設問において夜や放課後といった回答が多かったため、自宅での学習が最も多いという結果となった。一部、大学や通学時間帯に学習している学生の実態も明らかになった。

表2 eラーニングの学習場所 (人)

自宅	39
電車	3
IT センター	2
ラーニングコモンズ	2
教室	1

(N = 47)

また、どのくらいの時間を1回のeラーニングに取り組んでいたのかに関する調査結果を表3に示す。最も多かったのが「30分程度 (14名)」、次いで「31~60分 (12名)」の学生である。eラーニングは1レッスン30~40分程度を想定して開発していたため、各学生1レッスンを受講していたと考えられる。しかし、60分以上レッスンを受講していた学生も多く、複数のレッスンを続けて学習するスタイルと1レッスンのみを学習するスタイルなど、学生の学習スタイルは多様であることが示された。

表3 eラーニング学習時間 (人)

30分程度	14
31~60分	12
61~90分	6
91~120分	4
121~180分	4
181~240分	4
241分~	2

(N = 46)

4.2 eラーニングの活用に関する学習効果

eラーニングを活用しての学習効果 (学生の効果知覚) に関する調査結果を表4に示す。設問1「eラーニングを活用して外国語をもっと学びたいという意欲・関心が高まった」では、「そう思う (34.0%)」「ややそう思う (45.3%)」と回答した学生が79.3%おり、外国語に対する学習意欲が高まっている様子が見受けられた。

設問2「eラーニングはリスニング力の向上に役立った」では、「そう思う (35.8%)」「ややそう思う (41.5%)」と回答した学生が77.3%おり、本教材がリスニング力を向上させる際に役立っていることが示された。

設問3「動画の視聴後、小テストにこたえることで学習内容への理解が深まった」では、「そう思う (34.0%)」「ややそう思う (43.4%)」と回答した学生が77.4%であり、学生が小テストで自らの理解度を確認することで学習内容への理解が深まっていることが指摘された。

設問4「小テストの実施後、すぐに回答へのフィードバックがされることで学習内容への理解が深まった」では、「そう思う (32.1%)」「ややそう思う (49.1%)」と回答した学生が81.2%であり、即時のフィードバックが学習者の理解度に影響していることが見受けられた。

しかしながら、20%前後の学生はこれらの設問に対して「どちらとも言えない」「あまりそう
 思わない」「そう思わない」と答えている。これに関しては今後の課題（フィードバックの方法・
 内容とタイミングなど）として検討する必要がある。

表4 eラーニングの学習効果

設問	そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	そう 思わない	平均 (SD)
1. eラーニングを活用して外国語をもっと学びたいという意欲・関心が高まった。	18(34.0%)	24(45.3%)	6(11.3%)	4(7.5%)	1(1.9%)	4.02 (.97)
2. eラーニングはリスニング力の向上に役立った	19(35.8%)	22(41.5%)	10(18.9%)	2(3.8%)	0(0%)	4.09 (.86)
3. 動画の視聴後、小テストにこたえることで学習内容への理解が深まった	18(34.0%)	23(43.4%)	9(17.0%)	3(5.7%)	0(0%)	4.06 (.86)
4. 小テストの実施後、すぐに回答へのフィードバックがされることで学習内容への理解が深まった	17(32.1%)	26(49.1%)	6(11.3%)	4(7.5%)	0(0%)	4.06 (.86)

(N = 53)

4.3 eラーニングの活用に関する満足度

eラーニングを活用した満足度に関する調査結果を表5に示す。設問5「eラーニングで
 取り上げた内容、話題は魅力的であった」に関しては、75.5%の学生が「そう思う（34.0
 %）」「ややそう思う（41.5%）」と答える一方で、「どちらともいえない」と回答した学生も
 22.6%おり、改善に向けた課題が残った。

eラーニングで希望するテーマに寄せられた自由記述では、TOEICやTOEFLで出題され
 るテーマ、大学の専門分野に応じた内容、英語圏以外の国の文化などが挙げられた。ここか
 ら、学生の希望が、資格試験、ESP（English for Specific Purposes）、教養を目的としてい
 るなど自主学習のねらいが多様化している様子が見受けられた。今後、英語に関するeラー
 ニングを開発する際は、資格試験、専門分野における外国語、留学に向けた教養などそれぞ
 れの分野に分けた教材を準備する必要性が指摘された。

設問6「eラーニング教材は学習に役立つと思う」では84.9%の学生が「そう思う（34.0
 %）」「ややそう思う（50.9%）」と回答した。設問7「eラーニングの全体的な満足度につ
 いて教えてください」では「そう思う（22.6%）」「ややそう思う（54.7%）」と回答した学
 生が77.3%であったものの、「どちらともいえない」と回答した学生も18.9%であり、課題
 が残った。自由記述の改善点では、「スクリプトがほしい」「動画が長い」といった意見が寄
 せられた。本教材ではクイズに答えることで、学生は自らの読解に関する理解度を確認でき
 る。しかし、スクリプトを示すことで読解やリスニング力を自ら確認することができ、自主
 学習を促すことにもつながる。今後はスクリプトを確認できるステップを埋め込むことも有
 効だといえよう。また今回の動画は（実際の講義構成に近づけるために）15分程度のもので
 あったが、2本に区切ることや短い映像を用意することを検討する必要がある。

表5 eラーニングの満足度

設問	そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	そう 思わない	平均 (SD)
5. eラーニングで取り上げた内容、 話題は魅力的であった	18(34.0%)	22(41.5%)	12(22.6%)	1(1.9%)	0(0%)	4.08 (.81)
6. eラーニング教材は学習に役立つ と思う	18(34.0%)	27(50.9%)	5(9.4%)	3(5.7%)	0(0%)	3.17 (.78)
7. eラーニングの全体的な満足度 について教えてください	12(22.6%)	29(54.7%)	10(18.9%)	2(3.8%)	0(0%)	4.13 (.81)

(N = 53)

4.4. eラーニングの操作性

eラーニングの操作性に関する調査結果を表6に示す。設問8「eラーニングの動画は見やすかった」と設問9「eラーニングの操作方法は容易であった」では、90%以上の学生が「そう思う」「ややそう思う」と回答し、設問10「eラーニング教材の説明はわかりやすかった」では、84.9%の学生が「そう思う(41.5%)」「ややそう思う(43.4%)」と回答した。eラーニングの操作性に関しては総じて高評価を得ることができた。本教材にはスマートフォンのアプリケーション等で利用されている動画の再生や回答をボタンで選択する形式を採用している。利用者にはeラーニング教材の操作に関して説明をしていなかったが、日常的にスマートフォンやタブレットを利用することに慣れている大学生であれば、eラーニングの操作性に困難を感じることなく利用している様子が見受けられた。

表6 eラーニングの操作性

設問	そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	そう 思わない	平均 (SD)
8. eラーニングの動画は見やす かった	25(47.2%)	23(43.4%)	3(5.7%)	2(3.8%)	0(0%)	4.34 (.76)
9. eラーニングの操作方法は容易 であった	29(54.7%)	19(35.8%)	2(3.8%)	3(5.7%)	0(0%)	4.40 (.82)
10. eラーニング教材の説明はわか りやすかった	22(41.5%)	23(43.4%)	6(11.3%)	2(3.8%)	0(0%)	4.23 (.80)

(N = 53)

5. まとめと今後の展望

本研究では、学生の自学自習を促す英語eラーニング教材を開発し、その評価を行った。アンケート調査の結果、学生は帰宅後に自宅でeラーニングに取り組んでいる傾向が読み取れ、教材開発は授業外の学習時間を増加することへとつながることが確認された。また一方で学習時間に関しては個人による差が大きいことも示されたため、学生の動機づけに関するさらなる調査が求められる。

eラーニングの学習効果に関してはリスニング、小テストとテストに対するフィードバック等の効果が確認された。7割程度の学生が全体的な満足度を示していることがわかった。しかしその一方で、教材で扱ったテーマに関しては3割程度の学生が別のテーマを望んでい

ることも明らかになった。学生からは ESP、教養、TOEIC などの資格試験に対するテーマなど幅広い関心が寄せられたため、どのテーマに焦点を置いて学生の学習支援を実施すべきかを検討する必要性が示された。教材の操作性に関しては満足度の高い結果となったが、動画の長さに関しては課題が残った。映像を区切ったり、スクリプトの提供をしたりという対応策も、学習目的に応じて検討することが必要になるだろう。

学生の自主学習を促す e ラーニング教材を開発することで、授業外にも学生が自主的に学ぶ環境を構築することができることが明らかになった。学生の学びをより促すためには、どのような e ラーニング教材を学生に提供することが望ましいのかに関してより、正課との連携を考慮し、今後具体的に検討する必要がある。

謝辞：本教材を開発するにあたりご協力いただきました外国語学部の染谷泰正教授、植木美千子准教授、Brent Cotsworth 特任外国語講師、教育推進部の Mark Ombrello 特任准教授、Oliver Belarga 特任助教、国際部の池田佳子教授、教育開発支援センターの佐々木知彦研究員に感謝申し上げます。

付記：本研究は、関西大学教育改革推進特別予算事業、および文部科学省科学研究補助金・基盤研究（C）（研究課題番号16K01143）の一部である。

参考文献

北爪佐知子（2013）. 「近畿大学の学習支援：近畿大学英語村 E³ [e-cube]」『IDE：現代の高等教育』556、53-57.

産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会（2010）. 「産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会報告書——産学官でグローバル人材の育成を——」

<http://www.meti.go.jp/press/20100423007/20100423007-3.pdf>（情報閲覧日2017年1月22日）

友松篤信（2012）. 『グローバルキャリア教育——グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版.